# ドロップアウト・ラヴストーリー

アベレージ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドロップアウト・ラヴストーリー

【Ｎコード】

Ｎ６８１３Ｐ

【作者名】

アベレージ

【あらすじ】

道を踏み外した少年と汚れてしまった少女の純粋なる愛の物語。

――――――ズンチャカズンチャカと賑やかな音が響く。
数十ほどの人影が、奇怪な動きで燃え盛る火の周りを踊り歩く。

燃えているのは全長が十五メートル程の、羽の生えた爬虫類っぽい何か。その体には無数の裂傷が見え、何より目を引くのはその頭部。凶悪なほどに鋭く尖った牙と、その強靱さの一片を窺い知ることが出来る発達した巨大な顎は、しかし、下顎のみを残し、そこから上はまるで掘削機で無理やりえぐり取られたかのようなグロテスクな光景が。

そして、その爬虫類の周り、仮面を付け黒装束を身にまとった人影は、まるで何かに祈りを捧げるかのように一心不乱に踊り狂っていた。

――――――僕はその光景をただ黙って眺める。

どれだけ経ったのか。緊張によって靄の掛かった思考では正確な時間を把握することも叶わず。
やがて、単調に繰り返されるそれは佳境を迎えたのだろうか、より激しく、より狂ったように舞う。
その数十の人影は燃える爬虫類の周りから、踊りつつ移動を始める。

そして、音は止み、あたりには静寂が訪れた。
台座の上に設けられた豪奢な椅子に深く腰掛けた僕の眼下には、まるで頭をたれるように跪いた大小さまざまな黒い影が。
僕はその光景をただ黙って眺める。

――――――乾いて痛みを訴える唇を、ゆっくりと舌先で湿らす。

そして、整然と並んだその中から立ちあがり、歩み寄るソレ。ソレは、台座の階段を上り、僕の足元で再び頭を垂れて跪く。

「闇黒神様。我ら闇黒神教徒は全て敬遠なるあなた様の僕。これからは生きるときも死する時も、この身はあなた様のものであると、ここに誓いましょう」

そう言って下げていた頭を上げ、真っ直ぐ僕の瞳を見据える。

ソレは少女だった。年は十七か十八程だろうか。透き通るような淡い水色の髪と水色の瞳。一言で言うなら彼女は美しかった。これが学校の廊下でたまたますれ違ったなどという日常の延長線上であったなら僕は間違いなく一目ぼれをしていたと断言できる。

だが、だがしかし、僕が見てしまったそれは僕の望んだシチュエーションからは１７０度ほどかけ離れていて。

つまりそれは見た目美少女なソレが、まるで悪い冗談のようにあの爬虫類の上顎を殴り散らす光景を。

冷や汗が止まらないのである。

何かを乞うように僕のことを見つめるその双眸の奥。腐敗物か汚物かはたまたヘドロが渦巻くかのように濁りきった淀んだ光に気付いて。

それをうっかり覗きこんでしまった時から頬を伝う冷や汗が止まらないのである。

「そして、我らが願うことはただひとつ。我らの神を理解できない愚か者たちに神の鉄槌を。そして唯一神である闇黒神様による世界の支配を」

しかし、同時に理解していた。もう僕が引き返せないのだと。彼らの目を背けたくなるような狂的な信仰なくして、僕が僕であることすらできないのだと。

もう引き返すことはできないのなら演じきって見せようと心を奮い立たせ――――――たとえそれが絞りかす程度だろうと――――――、僕は立ちあがる。

一瞬膝が抜けそうになったが何とかこらえて立ちあがる。そんな僕を見て少女はああ、闇黒神様……、と艶めかしく呟き陶酔した笑みを浮かべる。ドロドロと渦を巻く瞳は心の安寧のために視界からそっと外す。

立ちあがった僕へ、跪いていた自称闇黒神教徒の黒ずくめたちが顔を上げる。ネバ着いた気配が絡みついて背筋に震えが走る。一瞬緩みかけた肛門括約筋を締め直し、僕は全力を込めて表情筋を総動員、余裕の笑みに見えるような表情を張り付ける。

「――――僕は神闇（かみや）　太郎（たろう）といいます。世界に生まれ落ちた闇黒神の卵です。え、えっと、あ、あなたたちの信仰にこたえられるように精いっぱい頑張りたいと思いますのでどうかお手柔らかにお願いいたします」

転校生の慣れない自己紹介みたいになってしまったけれど、こうして僕は何の因果か、闇黒神なんていうものになってしまった挙句に、死なないためにもこの世界で新たな一歩を踏み出す、いやむしろ踏み外してしまったのだろうか？

その日、別に普段と変わったことをした覚えなんかはなくて。今までの人生だって、平凡に、凡庸に生きてきたはずだったんだ。

それが、いつも通りの下校途中、何となく踏んづけたマンホールに落ちたと思ったらゲームでよく見るような真っ白な神殿みたいな場所に立っていて、なぜか大騒ぎされた挙句剣とか槍とか持った物騒な人たちに取り囲まれて縄で縛られて、そしたら仮面かぶった人たちがどこからか乱入してきて助けてくれて、周りの景色がやけに赤く染まっていたような気がしてけど良く覚えていない。

それが三日前の話。そしてこの三日で僕自身がどうなったのかも理解した。

というより、それはまるで忘れモノの場所を漸く思い出せたかのような、不自然なくらいに自然と自分のことについて理解した。

どうして僕なのかはわからないけど、例えば僕はもう人ではなく闇黒神という単一種であることとか、この身を保つためには純粋な信仰の力が必要だとか、闇黒神を信仰する人たちにはゴッドパワーよって恩恵が授けられるとか。

これが他人から聞いた話だったなら速攻で黄色い病院を進めているところだけど、原理はわからなくとも生憎それが純然たる事実であるのは頭でなく体で理解しているのだからどうしようもない。どうしようもないのだが、これから一生この人たち無くして生きていくことが出来ないという事実に小市民な僕のメンタルが悲鳴を上げる。故に心の汗が溢れて止まらないのも仕方のないことだと思う。

つまりこれは僕（闇黒神）が彼ら（闇黒神教狂徒）に愛想を尽かされないように奮闘する、ラブストーリーと言えなくもない物語である。

## （後書き）

主人公・神闇　太郎（１７）
闇黒神の卵。凄く普通の少年。ハートはガラス細工。
ある日突然信仰の力によって体を保つエコな存在になってしまう。
信仰の数と質でゴッドパワーが強化される。

ヒロイン・闇黒神教主（１６）
水色の髪と目の凄い美少女。闇黒神教の巫女でもある。
ゴッドパワーの恩恵によりワンパンチで、最強種のドラゴンを解体することが出来るほどの一騎当千を素でやってのける冗談みたいな力を得る。

闇黒神教信者（現在４３名）
基本的に他の宗教信仰者に対して血も涙もない連中。闇黒神への信仰パワーによって一騎当百ぐらいの猛者ぞろい。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6813p/

ドロップアウト・ラヴストーリー

2011年10月6日16時53分発行